

Hans-Dieter Lucas(Hrsg.), *Genscher, Deutschland und Europa*, Baden-Baden 2002. ISBN 3-7890-7816-6.

深 津 香 緒 里

一 本書について

本書は、ハンス・デイトリッヒ・ゲンシャー (Hans-Dietrich Genscher・一九二七年～) の外政・ヨーロッパ政策の、最も重要な側面について光を当てており、そうしたゲンシャーの思想と行動について学問的評価が加えられている論文集である。

ハンス・デイトリッヒ・ゲンシャーは、ドイツ連邦共和国^①の外務大臣を一九七四年から一九九二年まで務めた人物であり、外相として一九九〇年のドイツ統一を経験した。ゲンシャーの経歴は、一九二七年ライデブルク (東西ドイツの分断の時期は東ドイツ領) 生まれ。一九四六年から一九四九年までハレ大学とライプツィヒ大学で法学を学ぶ。一九五二年ドイツ民主共和国からドイツ連邦共和国へ亡命し、同年自由民主党(Freie Demokratische Partei・以下FDPと表記)に

入党。一九五四年にはブレーメンで弁護士業務を開始した。

一九六五年に連邦議会議員に当選、一九七四年一〇月より一九八五年二月までFDP党首を務めた。一九六九年から一九七四年までブラント (Willy Brandt・首相在任一九六九年～一九七四年) 内閣内相、一九七四年にはシュミット (Helmut Schmidt・同在任一九七四年～一九八二年) 内閣の外相・副首相となり、一九八二年のコール (Helmut Kohl・同在任一九八二年～一九九八年) 内閣成立以後も一九九二年まで外相・副首相を務めた。一九九二年以降はFDP名誉党首となっている。

また、編者のハンス・データー・ルーカス (Hans-Dieter Lucas・一九五九年～) は、ドイツ連邦共和国外務省の東欧・コーカサス・中央アジア特務公使である。一九八五年外務省入省。モスクワやワシントンの大使館で勤務。一九九五年から一九九八年まではゲンシャー機関の責任者を務めた。

本書の章構成は以下の通りである。⁽²⁾

・ Einführung (導入)

第Ⅰ章 Der Weg in die Außenpolitik

(1956-1974) (外政への道)

第Ⅱ章 Zwischen Kaltem Krieg und Entspannung

(1974-1984) (冷戦と緊張緩和の間で)

第Ⅲ章 Außenminister deutscher und europäischer Einheit

(1985-1992) (ドイツとヨーロッパ統一の外相)

第Ⅳ章 Einblicke und Einordnungen

(洞察と整理)

導入においては、本書の趣旨説明、各章の論文毎の概要が記されている。また第Ⅰ章から第Ⅲ章までが、時間の流れに沿ってゲンシャールの活動を取り上げたものとなっている。第Ⅳ章は時間の枠を越えて、ゲンシャールの政策スタイルについての考察を加えたものとなっている。

本書の出版の背景として、編者のルーカスは、大きく分けて以下の二点を挙げている。第一に、文献状況として、ゲンシャールの外政の学問的な評価がこれまで不足している点である。第二に、現代史・政治学などの面から、これまでのボン⁽³⁾の対外政策が「首相民主主義」(Kanzlerdemokratie)のイメージに倣いながら、特に連邦首相に還元されるという問題である。例えば、首相経験があるシュミット、コールに関しては、その任期中に研究テーマとして取り上げられたという事、さ

らに、一九七〇年代・一九八〇年代のドイツ史と外交政策や、一九八九年から一九九〇年にかけてのドイツ統一の歴史叙述においても、それぞれ当時の連邦首相に照準が合わせられていたという問題である。

これらの視点に対し、ルーカスは次のような主張を展開する。小さい方の連立政党(この場合、FDP)に、連邦外相のポストが与えられれば、首相中心の見方だけにはならない。その点が見逃されており、外相や官庁の影響力を無視している、つまり、再考の余地があるということであった。

次に本書が明示したい内容が二点挙げられている。一点目は、ゲンシャールが長期の外政・ヨーロッパ政策の観念を持っていたことであり、二点目は、彼が根気強さ・持続性を持つて内政上の抵抗に対して、その観念を遂行したことである。

また、ルーカスは、関係する書類が非公開期間にあたるため、外交史のレベルとしては完璧なものになりえていないと言及している。それでも彼は、ゲンシャールの外政・ヨーロッパ政策構想の主要方針について、最初となる概観を提供することが重要であると主張している。

さらに本書を紹介するものの中には、ゲンシャールの活動業績を越えて、七〇年代半ばから、いわゆる大転換(一九八九年・一九九〇年のドイツの体制転換)までのドイツの外政・ヨーロッパ政策の分析のための寄稿論文となっていると表現するものもある。

今回は、評者の特に関心のある時代である第Ⅲ章より、ス

ティープン・F・サボー「ヨーロッパ潮流交代の水先案内人——ゲンシャールと大転換の前兆（一九八五年—一九八九年）」(Stephen F. Szabo, „Lotse im europäischen Gezeitenwechsel – Genscher und die Vorboten der großen Wende (1985-1989)“; 以下サボー論文と表記)を中心に取り上げ検討していくこととする。

二 サボー論文

○ステイブン・F・サボー「ヨーロッパ潮流交代の水先案内人——ゲンシャールと大転換の前兆（一九八五年—一九八九年）」(Stephen F. Szabo, „Lotse im europäischen Gezeitenwechsel – Genscher und die Vorboten der großen Wende (1985-1989)“;)

本論文の著者であるステイブン・F・サボー (Stephen F. Szabo・一九四三年-) は、アメリカ、ワシントンD. C. のジョンズ・ホプキンス大学教授である。専攻はヨーロッパ研究で、現在の研究は、ドイツ政治、対外政策・ヨーロッパ政策、米欧関係を重点的に扱っている。⁽⁴⁾

本論文は、一九八九年から一九九〇年にかけての中・東欧における大変革の前の時期、主に一九八五年から一九八九年に、ドイツ連邦共和国外相であったゲンシャールの言動を考察したものである。ヨーロッパの安全保障についてのゲンシャールの基本的考え方に注意を払いながら、ソヴィエト連邦（以下ソ連と表記）への対応・核戦力についての対応等の具

体的行動を取り上げている。また、著者によるゲンシャール本人への電話によるインタビュ（二〇〇一年九月二日付）記録も取り入れた記述となっているのも特徴的な点である。

本論文には序文があり、その後の構成は以下の通りである。

第一章 政治的ルーツ・個人的ルーツ

第二章 ゲンシャールプラン

第三章 ゴルバチョフを本気で受け止めること

第四章 ゲームの終わり…短距離核ミサイルをめぐる格闘

第五章 結論

以下、序文を含めた各章の内容を説明していくこととする。

○序文

冒頭で、著者サボーは一九八九年から一九九〇年の大変革（東欧各国での革命や体制転換、東西ドイツにおけるベルリンの壁崩壊、ドイツ統一など）の起点をどこにおくのかは困難であるとの認識を示している。だが、一九八〇年代後半にソ連でゴルバチョフ (Mikhail Sergeevich Gorbachev) が権力を握った事⁽⁵⁾、ゲンシャールが西側陣営政治の最も重要な声——ゴルバチョフが安全保障政策の将来とヨーロッパ全体にとつていかに重要な存在であるかを主張した——になった事は明らかであると主張する。

著者は、ゲンシャールが持ち合わせていた先見の明の源が何にあるのかを吟味している。本論文では、①ゲンシャール個人のルーツや政治的なルーツ、②安全保障政策に対するゲン

シャアのセンス、③新しいヨーロッパ・その中でのドイツとソ連の役割についての理解の深さ、といった要素が丁寧に分析・考察される。その上で、ゲンシャアがどのような成果をあげたのか、結論付けている。

○第一章 政治的ルーツ・個人的ルーツ

本章は、ゲンシャアの政治家としての特徴を、政治的ルーツと個人的ルーツの二つの面から探っている。

著者は最初に、ゲンシャアが一九八〇年代半ば、最も影響力のあるヨーロッパの政治家の一人であったとし、その上でまず彼の政治的ルーツについて説明している。外相在任期間の大半をFDP党首として、また八〇年代後半のように事実上の党首として過ごしたゲンシャアには、克服するべき二重の課題があった。選挙時の五%条項（得票五%を獲得するか、三つ以上の小選挙区で議席を獲得した政党にのみ議席が配分される）のクリアとFDPの政権入閣である。著者はこの課題の克服が、ゲンシャアにとり際立った戦術能力を可能にしたと述べている。FDPは、ドイツ社会民主党(Sozialdemokratische Partei Deutschlands・以下SPDと表記)との連立を解消してキリスト教民主同盟(Christlich-Demokratische Union・以下CDUと表記)とキリスト教社会同盟(Christlich-Soziale Union・CDUの姉妹党、以下CSUと表記)と新たな連立政権を一九八二年一〇月に構成、一九八九年五月にはNATO(北大西洋条約機構)首脳会議でドイツ連邦共和国

は短距離核ミサイルの近代化問題審議を一九九二年に延期する事態となる。この一九八二年の政変と一九八九年NATO首脳会議でのゲンシャアの行動は彼に「アクロバットの曲芸師」の呼び名を与えた。著者はゲンシャアが「戦術家にすぎない」との批判を否定し、長きに渡って任期を全うし、西ドイツ内閣の重要な構成員であり続けたことが、外交政策・内政の見定め、二つを結びつけることを可能にしたと考える。ゲンシャアの対外的対応と国内への対応はひとつながりのものであったことを示しているのである。

次の個人的なルーツについては、ゲンシャアが東ドイツの出身であることが注目されている。ここでは、第二次世界大戦前後の時代についての個人的経験を語ったゲンシャアへの電話インタビューなどが生かされ、彼が東ドイツ出身であったことが、いかに戦略的考察を可能にさせたかを明らかにしている。

以上のようなゲンシャアの政治的ルーツ・個人的ルーツが示されているが、そこから彼の考えるヨーロッパは欧州共同体(EC)よりも大きいこと、既に内相経験もある彼にとり、ドイツ問題が中心的な役割を果たしていたこと等も導き出されている。

○第二章 ゲンシャープラン

本章では、ゲンシャアの安全保障、特に核戦力についての見解が紹介されている。ゲンシャアはまず、核兵器による軍

事攻撃の抑止という意味での核抑止には肯定的な立場であった。基本的に核抑止政策・NATO・アメリカには大きな信頼を寄せていた。

一方で、彼は短距離核ミサイル(SNF)に反対した。ただし、この反対はSPDとは異なり、核抑止の原則自体を締め出したものではなかった。ヨーロッパでの核戦争遂行の拒否——西ドイツの伝統的な拒絶反応——の上にあるものだった。

しかしながら同時に、ゲンシャールは共同安全保障の枠の中で、純粹の抑止を超えた、核戦争を妨げることの出来るような「安全保障網」の構築を支持していた。これはゲンシャールの言葉で言うならば、「核と通常の抑止の究極のネットワークを超えて、さらに軍事的抑止をあてにした時発生することになるリスクを最小限に抑えるネットワークが存在しなければならぬ」という事である。著者は新しい安全構想としてのこの理念こそ、ゲンシャールプランの中心であったと述べている。ゲンシャールは包括的な安全保障の定義づけの中で、軍事的要素のウエイトを経済的・文化的側面などに拡散させようと努めた。脅威を与えるために軍事力を乱用したり軍事的に優位に立つ努力をするのは、不安定要素となり、不安な状態に寄与することになり、ゲンシャールは多国間での協調体制を構築すべきであると考えた。

この軍事的安全保障の観点は、ドイツ国内においては、肯定的反響を呼んだが、一方でかなりの欧米諸国には不信感を

与えるものとなった。

このようなゲンシャールの見解は一九六七年のNATOのハルメル報告に基礎を置いた試みに根ざしていた、と著者は指摘する。ハルメル報告は、軍事力による安全保障を維持しながら、緊張緩和を進めていくという特色を持ち、登場以後はNATOのドクトリンとなった報告である。また、ゴルバチョフがソ連で全権を握ることによって具体的な形を取り始めた」と説明している。

○第三章 ゴルバチョフを本気で受け止めること

第三章では八〇年代後半ゲンシャールのソ連に対する見解がどのようなものであったのか、そして実際にどのような態度を示したかについて、一九八七年二月のダヴォス(スイス)での演説などの具体例を取り上げ述べている。同時に、ソ連のゴルバチョフの安全保障に関する考え方がいかなる影響を及ぼしたかを明らかにしている。

最初に著者は、一九七〇年代末から一九八〇年代に徴候を見せ始める大転換の最大の意義を、一九八二年のコールIIゲンシャール内閣(CDU・CSUとFDPとの連立政権)への政権交代に置いている。ゲンシャールはSPDとの連立政権から引き続き外相・副首相として入閣したが、新政権は、前政権の方針でもあった緊張緩和政策の継続を広くドイツの人々に示す必要があり、CDU・CSU内部の反対勢力と戦っていかなければならなかった。特に後者に関しては、ゲンシャール

と「ゲンシャリズム」が激しい攻撃を受けた。さらに、ゴルバチョフは書記長就任当初、ドイツについて殆ど知識を持ち合わせておらず、ソ連側にも「ドイツは脅威」との認識があった。だが、一九八六年四月のチェルノブイリ原発事故は、ゴルバチョフにソ連の科学技術の遅れと、徹底的な経済的政治的改革の必要性を強く認識させた。

また、その後、ゴルバチョフを第三帝国の宣伝相ゲッベルスにたとえたコールの失言（一九八六年一月）で独ソ関係は冷え込んだこともあって、コールとゲンシャーとの間ではある種の分業がなされるようになる。それは、コールと首相府が、アメリカと西ヨーロッパ統合の関係、一方外務省（ゲンシャー）は、ソ連とワルシャワ条約機構加盟国との対応に従事するというものであった。

そして、本章では、一九八六年七月のゲンシャーとゴルバチョフの初会談（モスクワ）については、両者の出会いがいかに重要であったかが強調されている。会談は、ゲンシャーはソ連がアメリカと西ドイツの連携を破壊させることは出来ないことと示す一方、緊張緩和に対するドイツ人の関心を強調した。ゴルバチョフも以上はよく理解した。ゴルバチョフは国外から変化を強いられている印象を呼び起こしたくはなかったものの、自国の本格的変革を説いたことで、ゲンシャーは前任者との差を意識し始めた、という。著者はゲンシャーとゴルバチョフとの出会いは、独ソ関係（この場合、独は西ドイツ）に新たなダイナミズムをもたらしたと捉えている。

この初会談で獲得したゲンシャーのゴルバチョフに対する印象が、その後のゲンシャーの政策を形成していく。その表れの一つが一九八七年二月のダヴォス（スイス）で開催された世界経済フォーラムでのゲンシャーの演説であった。ゴルバチョフは書記長就任後「新思考」を打ち出していた。ゲンシャーはそれに関連して、西側諸国は、軍拡競争を妨げ、ソ連経済を世界に開くために、ソ連の新指導者に外交的に支援する必要があると主張した。そして軍事技術だけではどんな防衛も不可能であり、政治的手段が必要であることを訴えた。

また、ゲンシャーは、一九八八年一〇月ボローニャの大学施設において「ヨーロッパの未来」についても言及している。それによれば、ドイツ国家とドイツ人は一つのヨーロッパの形での平和的な統一に責任がある。彼にとって、ヨーロッパとは、西欧或いはEC以上のものを体現し、ドイツ分断の数十年前は二つのヨーロッパ・二つのドイツ国家を作り出したわけではないというものであった。ゲンシャーは多くの機会に、ドイツ問題は一つのヨーロッパの文脈の中で解決されるべきであると強調した。

このように、著者はゲンシャーがダヴォスにおいてゴルバチョフを本気に受け止めよ、と主張したことに注目し、ソ連も了解出来るようなヨーロッパの枠組みの中での統一を求めている点に注意を促している。また、ゴルバチョフの「新思考」が安全保障政治における新たな始まりであり、ヨーロッパ分断の克服の可能性を開いたと考えている。

○第四章 ゲームの終わり…短距離核ミサイルをめぐる格闘

第四章では、短距離核ミサイル(SNF)を巡る議論に焦点が当てられている。本章では、SNF近代化推進の立場と、ゲンシャールの立場が並行して提示されている。そして、アメリカとの協議を経て、一九八九年五月二九日・三〇日のNATO首脳会議で、ゲンシャールの意向であったSNFの近代化延期の合意がなされるまでの状況が取り上げられている。

著者は、ゲンシャールの一九八七年二月のダヴォスでの演説以降、ゴルバチョフの西ドイツ初訪問等の緊張緩和の動きが進展する中で、核戦略についての議論、わけでもドイツにおけるSNFに関するNATOの政策についての議論が沸騰した状況を説明する。

一九八七年一二月には米ソ間でINF全廃条約(中距離核戦力全廃条約)が調印された。これは、両国の中距離核戦力の全廃を決めるもので、核戦力に関わる初めての軍縮条約であった。これに対して、多くのヨーロッパの政治家は、東西両陣営でINFシステムを取り除くという方法を認めず、INF全廃条約締結後、残存している短距離システムに価値を置くようになった。イギリスのサッチャー(Margaret Thatcher・首相在任一九七九年～一九九〇年)もランス・ミサイルを用いた短距離ミサイルの近代化を要求し、当初はコールも近代化支持者をバックアップしていた。一九八九年五月のNATO首脳会議では、アメリカ、イギリス、NATO事務総長でドイツ人のマンフレート・ヴェルナー(Man-

fred Wörner)も近代化決定をせき立てた。

ゲンシャールはどういう立場だったろうか。彼はSNFの近代化を支持しなかった。一九八八年終わり以降、近い将来においてランス・ミサイルの近代化には同意しない決意を固めていたという。著者は、彼が東ドイツ出身であったことが、この見解の形成に大きく作用したかもしれないと考えている。そして、CDU・CSU多数派の反対があったものの、最終的に西ドイツ世論を考慮したコール⁽⁹⁾ゲンシャール内閣の課題はアメリカのブッシュ(George H. W. Bush・第四一代大統領、在任一九八九年～一九九三年)政権にSNF近代化の延期が必要と納得させることになった。

サボーによれば、レーガン(Ronald W. Reagan・大統領在任一九八一年～一九八九年)政権側はゲンシャールに不信を抱いていた。しかし次のブッシュ政権下で国務長官を務めたベーカー(James A. Baker III)はゲンシャールの能力を評価するようになり、ゲンシャールに対する疑念を脇に置き、協同作業することを決意した。

そして、一九八九年五月二九日のNATO首脳会議では、妥協が必要であったものの、ゲンシャールの主張するSNFの近代化決定の延期(一九九二年へ)の合意に至った。

ゲンシャールはこの合意は東西関係における新たな力学を維持していくためには必要であったとみなしている。そして、著者によれば、この結果はドイツの立場と外務省の勝利を意味し、ゴルバチョフの立場も政治的に強化された。結果的に、

ゲンシャール、ベーカーらの親密な協同作業は、ドイツの再統一過程の方向を示すものであることが証明されたのである。

○第五章 結論

最終章では、これまで見てきたゲンシャールの思想と行動に対する著者の見解がまとめられている。著者はゲンシャールが一九八九年五月のNATO首脳会議と、ドイツ統一に関わる問題等について協議した一九九〇年の二プラス四交渉で、外交権力の絶頂点に達したと見ている。だが東欧・ソ連で変革が起きて以降、状況は変化し、権力の中心が首相と首相府に移動した。しかしながら著者は、ゲンシャールがゴルバチョフと彼を生み出した戦略的状况を適切に理解したと評している。西側世界で自らの行動を定着させたことが、最終的には西側の東方政策において先駆的役割を果たすことを可能にしたとサボーは指摘しているのである。ちなみに、コール、ゲンシャールは分業体制を作り上げていたとの指摘が再度登場する。そして著者はヨーゼフ・ヨッフエ (Josef Joffe・一九八五年～二〇〇〇年、南ドイツ新聞編集者) によるゲンシャール評価を紹介している。

「シュトレーゼマンは優れた戦略家 (strategist) であつた。しかし、ゲンシャールは優れた戦術家 (tactician) であつた。」この考えに対してゲンシャール自身は、戦術家というのは条件付きで当たっているが、strategist的面を見ないというのは過小評価であるということにもおわせている。サボーも

ヨッフエの評価には同意していない。サボーによれば、ゲンシャールの戦術の背後には、長期の一貫したヴィジョンが隠されており、ただ戦術家とみなすことは不当に扱うことになるとしている。

もともと、著者は、ゲンシャールがヨーロッパ統一はドイツ統一より先に起こると想定して再統一過程の経過を誤って評価し、ソ連のよろさについても過小評価した、と付け加えている。しかし、ゲンシャールが一九八〇年代にドイツの外政に強い影響を与え、緊張緩和の道を準備し、問題のあるソ連との信頼関係構築にも尽力し、ソ連のゆるぎないパートナーとしてのドイツ (西ドイツ) を確立させたと評価する。

最終的には、一九八五年から一九八九年の事態発展において重要な役割を果たしていたという点で、人々がゲンシャールに対する記憶をとどめて置くであろうこと、一つのヨーロッパと一つになったドイツへの平和的貢献についても忘れないだろうと結論付けられている。

三 サボー論文の考察と本書の特徴

以上見てきたように、本論文は、ゴルバチョフが重要な存在であることをいち早く見抜きそれを訴えたゲンシャールに、どれほど先見の明があつたのか明らかにしている。この場合、著者は彼の政治的・個人的ルーツ、安全保障政策に関する彼の思想と行動、ヨーロッパとその他のドイツの役割についての理解等、多角的に考察を加えた。ゲンシャールが一九八〇

年代にドイツの外政に大きな影響を与え、緊張緩和に貢献したこと、ソ連との関係構築に力を尽くし、ソ連のパートナーとしての西ドイツを確立させたことも説得的に示している。

本論文の大きな特徴は、あくまでもゲンシャールの側に立つて彼の具体的思想と行動を明らかにしていることにあると言えよう。何よりも、大転換の時期に外政を担う立場にあったゲンシャール個人の考え、背景となるルーツ、一九八〇年代後半の行動を詳細に明らかにしている点は評価すべきである。諸々のコール分析にはない視角である。

さらに、ゲンシャール本人へのインタビュー（二〇〇一年）が収められていることも特筆すべき点である。外政を担った当事者が、当時どのような考えからその行動に至ったのか、或いは、一つの出来事について何を感じていたのかを知るにも、非常に示唆的である。

以上が本論文について評価出来ると思われる部分である。次に、問題と思われる部分について述べてみたい。

著者は結論部分で、ゲンシャールが長期のヴィジョンを持っていたと述べている。だが「長期のヴィジョン」を持っていたと示すには、今回論文が対象とする一九八五年から一九八九年を扱うだけでは期間が短いのではないだろうか。「長期のヴィジョン」の存在を示す場合、ゲンシャールが進めたといわれるEC統合の政策や、ヨーロッパ全体に向けられた目にも注意が払われる必要があると思われる。

例えば、CSCE（欧州安全保障協力会議）主要会議の一

つである、ストックホルムにおけるヨーロッパ軍縮会議（CDE、一九八四年一月～一九八六年九月）の開催にあたってゲンシャールは、東ドイツ外相と主導権を握って当初考えられていた事務レベルでなく、首相・外相レベルでの会議を実現させた。会議では軍事活動計画の事前通知や現地査察などが決められた。この会議の成功は、人権問題を討議したウィーン・フォロー・アップ会議（一九八六年一月～一九八九年一月）の活性化につながったと指摘もされている。

このようなゲンシャールのヨーロッパ全体に関わる活動やEC統合の政策推進についても、今回対象とする時期とは若干異なるが、最低限の言及は必要であったと思われる。それらについて触れないのであれば、その理由を明示した方が良いのではないか。これと関連して、一九七三年に始まるCSCEとゲンシャールとの関わりについても触れる必要があるのではないかと考えられる。本論文にはCSCEが少し登場するが、彼の役割については殆ど取り上げられていない。ゲンシャールの活動を時代毎に取り扱う本書には第Ⅱ章にCSCEプロセスに関係する論稿があり、また、サボーは他のところで言及しているのかもしれないのだが、もう少し説明が必要ではないだろうか。

そして、著者のゲンシャール評価を考察する際も次の点に注意が必要であると思われる。それは、本論文が当事者による発言を多く取り扱っている点である。本論文は、かなりゲンシャールの言動を扱っている。著者の付けた註の多くも、ゲン

シャー本人の言葉によるもの（演説・回顧録・インタビュー）で構成されている。ゲンシャーの対応を明らかにしている論文であるためやむをえない面もあるが、当事者が語っているということは、場合によっては自己の都合に合わせて物事を解釈している可能性が排除しきれない。さらに、当時を振り返る形式のものについては記憶がおぼろげになっている場合がある。

このように考えた場合に、本論文で著者はゲンシャーの主張を重視するあまり、ゲンシャーを高く評価しすぎてはいないのか、注意する必要があると考えられる。

とはいえ、本論文が取り扱う一九八〇年代後半、ゲンシャーは早くからゴルバチョフを支持しており、その点で西側世界では他の誰よりも先んじていた。大転換期を考察する際、その姿勢と背景にはスポットライトを当てる十分な価値があると思われる。

最後に、本書の特徴について付言しておきたい。

本書の特徴は、サボー論文とも共通するが、ゲンシャーという一人物の思想・行動について時間毎・テーマ毎に多岐にわたる問題を提供していることにあると思われる。

だが、本書を読み進める際には留意すべきなのは史料上の制約という問題である。他の評者も指摘しており、⁽⁸⁾ 編者も本書導入で言及しているように、当該時期に関わる文書の非公開期間にあたるため、史料上の制約が生じている。編者も指摘するように、外交史のレベルでは完璧とはいえない。

しかしながら、本書は大転換期の外相、ゲンシャーについて多くの情報を供している。対外政策について、首相だけではなく、外相の政策・対応にも着目すべきである、という編者ルーカスの観点は、引き続き関心を寄せるべきものであるう。

註

(1) 以下、一九九〇年のドイツ統一以前のドイツ連邦共和国を西ドイツ、ドイツ民主共和国を東ドイツと表記する場合がある。

(2) 本書の論文著者・タイトルは以下の通りである。

・ Hans-Dieter Lucas, Einführung.

I Der Weg in die Außenpolitik (1956-1974)

・ Hans-Dieter Lucas, „Von Halle nach Bonn – frühe Prägungen und Stationen“.

・ Hans-Dieter Lucas, „Wahrung der deutschen Option

— Hans-Dietrich Genscher und die neue Ost- und Deutschlandpolitik (1969-1974)“.

II Zwischen Kaltem Krieg und Entspannung(1974-1984)

・ Hans-Dieter Lucas, „Politik der kleinen Schritte-Genscher und die deutsche Europapolitik 1974-1983“.

・ Helga Haftendorn, „Hans-Dietrich Genscher und Amerika“.

- Ernst-Otto Czempiel, „Multilaterale Entspannungspolitik: KSZE-Prozess und das Ziel einer gesamteuropäischen Friedensordnung“.
- Dieter Bingen, „Realistische Entspannungspolitik: Der mühsame Dialog mit dem Osten - die Bundesrepublik Deutschland und ihre östlichen Nachbarn (1974-1982)“.
- Wolfgang Wessels, „Hans-Dietrich Genscher: Initiator des interregionalen Dialogs – Architekt einer Zivilmacht Europa“.
- Wolfram Kaiser, „Weltordnung der Partnerschaft: Genschers Ansätze einer westdeutschen Globalpolitik 1974-1982“.
- Hans-Joachim Vergau, „Genscher und das südliche Afrika“.
- III Außenminister deutscher und europäischer Einheit (1985-1992)
- Stephen F. Szabo, „Lotse im europäischen Gezeitenwechsel — Genscher und die Vorboten der großen Wende (1985-1989)“.
- Christian Hacke, „Der Mantel der Geschichte: 2+4 und deutsche Einheit in gesamteuropäischer Konkordanz“.
- Hans Werner Lautenschlager, „Auf dem Wege zur Einheit Europas: ein Jahrzehnt entscheidender Weichenstellungen europäischer Integrationspolitik (1983-1992)“.
- Stefan Fröhlich, „Potestas indirecta in der Kanzlerdemokratie – der ‚immerwährende‘ Außenminister und die ‚Richtlinienkompetenz‘ der Kanzler am Beispiel der Ära Kohl/Genscher“.
- Michael Libal, „Krieg in Mitteleuropa. Genscher, Jugoslawien und die serbische Herausforderung 1991/1992“.
- IV Einblicke und Einordnungen
- Richard Kiessler, „Außenpolitik als ‚Public Diplomacy‘ — Hans-Dietrich Genscher und die Medien“.
- Robert Leicht, „Hans-Dietrich Genscher“.
- Wolfgang Mommsen, „Hans-Dietrich Genscher. Visionär der Außenpolitik in einer demokratischen Weltgesellschaft“.
- Hans-Dieter Heumann, „Genscher, ein ‚liberaler‘ Außenpolitiker?“
- (3) Kanzlerdemokratie といふ「宰相民主主義」といふ語の
あらが、本稿では「首相民主主義」といふ表記を統一
する。
- (4) 主な著作には以下のものがあふ。

Parting Ways: The Crisis in German-American Relations

tions, Washington, D.C. 2004: „Germany and the United States after Iraq. From Alliance to Alignment“, in: *Internationale Politik und Gesellschaft*, H.1, 2004: *The Diplomacy of German Unification*, New York 1992: *The Changing Politics of German Security*, New York 1990.

- (5) ゴルバチョフは一九八五年三月にソ連共産党書記長、一九八八年一〇月には最高会議幹部会議長に就任した。以下、「ブッシェ大統領」の表記は第四一代大統領を指す。

- (7) Gustav Stresemann (一八七八年～一九二九年・首相在任一九二三年)。一九二三年から一九二九年まで外相を務めた。

- (8) インターネット上で読めるものには、以下が挙げられる。

Vgl. Rezension von Werner Bühner (<http://hsozkult.gesichte.ch/tehu-berlin.de/rezensionen/id=6663&count=1&reco=1&type=rezbuecher&sort=datum&order=down&search=%22Hans%2DDieter+Lucas%22>).